

母語教育は何を目指すべきか —日本の公立学校で母語教育を受けた卒業生の語りから—

What should Mother Tongue Education Aim For

Insights from Graduates who Received Mother Tongue Education in Japanese Public High School

王一瓊 (Wang Yiqiong)

本発表では、移民第一世代に対する母語教育に注目する。発表者はこれまで「日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学者選抜」が実施される大阪府立高校にて、フィールド調査を行ってきた。調査校では当該の選抜で入学する外国人生徒を対象に母語教育が実施されており、母語教育の重要性が繰り返し指摘されてきた(志水 2008、山本・榎井 2023)。これらの研究では学校システムを中心に教育実践が捉えられてきた。一方、発表者は母語教育の受け手である生徒の視点から研究を進めるために、授業における参与観察や生徒・卒業生を対象としたインタビュー調査を実施してきた。

川上(2021)は、幼少期から複数言語環境で成長してきた人の生を理解するのに有効な分析概念として「移動する子ども」を提示し、「今、ここ」の日常的移動の横軸と、「あの時そしてこれから」という過去と未来を繋ぐ個人史的移動の縦軸の双方から分析を行うことの重要性を指摘している。そこで、本発表では高校在籍時に母語教育の受講経験を有する大阪府公立高校の卒業生への縦断的なインタビュー調査の結果を示す。高校在学時の意識と比較し、その意識の変化を分析することで、公教育における母語教育は何を目指すべきかを検討する。

分析では横軸を示すために、さまざまな多言語社会における言語選択・運用を考える際に有効な道具であるドメイン・領域(Fishman 1972)という概念を援用する。「家庭」、「友人関係」、「宗教」、「教育」、「雇用関係」といった5つのドメインから母語使用の実態を明らかにし、母語教育に対する意識を分析した。同時に、縦軸を示すために、卒業生のライフイベントを念頭に置きながら、生活様式や言語使用状況を分析し、卒業生の母語への捉え方及び今まで受けてきた母語教育の捉え方及びその変化を分析した。